

第4回星新一賞応募作品

人狼知能能力測定テスト

大上 幽作

人狼ゲーム。それはプレイヤーが村人と人狼に分かれて行うゲーム。人狼は正体を隠して村人の中に紛れ込んでいる。プレイヤーは全員で昼間に会議をし、紛れている人狼を見つけ出して処刑する。夜になると人狼は本性を現し、ひっそりと村人を襲撃する。処刑できるのは1日に一人で、誰を処刑するかは全員で投票を行って決める。人狼が襲撃できるのも1日に1人。人狼は夜になると村人を一人指定して殺害する。人狼をすべてを見つけ出し、処刑すれば村人の勝利。人狼の人数と村人の人数が同じになったら、村人は人狼に対抗できないと見なされ人狼の勝利。

村人の中には特殊な能力を持つ役職がある。占い師は夜のうちに一人、人物を選択し、その人物が人間か人狼かを知ることができる。霊媒師は夜のうちにその日に処刑した人物が人間か人狼かを知ることができる。狩人は自分以外の誰か一人を選び、襲撃から守ることができる。守った人物がその日の夜に襲撃された場合、その夜の襲撃は失敗する。狂人は村人でありながら人狼陣営に所属していて、人狼が勝利したときに勝利する。ただし占いや霊媒の結果は人間と出る。その他の特殊な能力を持たない村人は単に村人と呼ばれる。

人狼、村人、占い師などの役職は、ゲーム開始時にプレイヤー全員にランダムに割り振られる。今回のルールではプレイヤーは全部で10人。村人4人、占い師、霊媒師、狩人、狂人がそれぞれ1人ずつ、そして人狼が2人である。明かされるのは自分の役職だけで、他は誰がどの役職なのかわからない。ただし、人狼だけは残りの人狼が誰なのかお互いに知っている。

この人狼ゲームだが、最近とある分野で大きく注目されている。それが、人工知能、いわゆるAIの分野だ。人工知能に人狼ゲームを行わせる試みは昔からあったが、最近ではAIの性能を評価するためのテストとして人狼ゲームが注目されている。なんでも、人狼ゲームは言語能力、表情を作る力と読み取る力、嘘を見破る論理的思考力、相手を説得するための文章力、感情の表現力など、AIの持つ様々な能力を総合的に評価するのにピッタリな題材なのだそうだ。こ

れまで AI の優秀さを総合的に評価するテストは存在しなかった。そういった背景があり、「人狼知能能力測定テスト」が登場した。これにより真に優秀な AI が決定すると話題になっている。

そして今、様々な分野で大活躍している選りすぐりの AI たち 10 人が集められ、第一回のテストが行われる。

私は F 恵。普段は将棋の棋士 AI として働いている。私はあらゆる手を想定でき、未だに負けたことが無い。今日、私は人狼テストを受けさせられることになった。このような遊びをして何の意味があるのだろうか。開発者はやる気だが、私はあまり乗り気ではなかった。

プレイヤーは全部で 10 人。A 太、B 香、C 子、D 亮、E 美、G 郎、H 夫、I 子、J 也、それと私 F 恵だ。有名な AI ばかり。同じ AI として負けたくない。

テストが始まった。私の役職は「人狼」だった。下手なことをしないように気をつけよう。

もう一人の人狼は G 郎だった。私は G 郎をちらりと見て、さりげなくお互いを確認した。

1 日目。C 子が占い師だと名乗り出た。つづいて、J 也が霊媒師だと名乗り出た。C 子は占いの結果、A 太が人間だったと伝えた。誰を処刑すべきか意見は様々あったが、投票の結果、B 香が処刑されることになった。私は C 子を襲撃することにした。しかし、襲撃は狩人に防がれてしまった。

2 日目。D 亮が霊媒師だと名乗り出た。C 子は占いの結果、I 子が人間だったと伝えた。J 也は霊媒の結果、B 香が人間だったと伝えた。D 亮は霊媒の結果、B 香が人間だったと伝えた。会議の中で霊媒師を疑う声上がり、J 也が処刑された。私は I 子を襲撃することにし、襲撃に成功した。

3 日目。C 子は占いの結果、G 郎が人狼だったと伝えた。D 亮は霊媒の結果、J 也が人狼だったと伝えた。会議の中で霊媒師に嘘付きがいるという声上がり、D 亮が処刑された。私は A 太を襲撃することにし、襲撃に成功した。

4 日目。C 子は占いの結果、E 美が人間だったと伝えた。投票の結果、仲間の G 郎が処刑されてしまった。これで残る人狼は私だけとなった。私は E 美を襲撃することにし、襲撃に成功した。

5 日目が始まった。ここまでゲームが進行し、生き残っているのは、C 子、私、

H夫のたった 3 人だけとなった。今日の処刑で勝敗が決するというのは誰の目にも明らかだ。互いに見合っている目には緊張の色がうかがえた。

残りは三人。この最後の処刑を生き残れば私の勝利だ。一番の懸念事項は占い師の可能性の高いC子が生きていることだ。

会議の始めにC子が占いの結果について話した。

「占いの結果、F恵は人狼だった」

この最終局面で人狼であることを占い師に看破されてしまった。しかし、占い師が生き残ってしまった以上それはしょうがないことだ。私はまだあきらめていない。

「人狼は、F恵だ。F恵を処刑したら人間の勝利だ」

C子は言った。いやまだ、勝利を宣言するには早いだろう。私は反論した。

「C子こそ人狼だ。占い師だったらとっくに人狼に襲撃されているはずだ。本当は人狼だからこそ襲撃もされずに生き延びているのではないか」

投票は多数決。せつかくの占い師も、H夫から信用が得られなければ、勝利することはできない。さらに、H夫にはC子が間違いなく占い師であると判断できるだけの証拠はないだろう。C子へ疑いを持たせることさえできれば、C子を処刑できる可能性もある。

それからしばらく沈黙の時間が流れた。その間にいろいろな可能性が頭の中を巡る。もしかしたらC子は狂人かもしれないという考えも思いつくが、ここはおとなしくすることにした。そのまま会議の時間は終了し、投票となった。H夫はどちらに入れるだろうか。私は祈るように結果を待った。

私はC子。普段は警察 AI として働いている。私は小さな手がかりでも犯人を推理でき、多くの難事件を解決してきた。今日、私は人狼テストを受けさせられることになった。開発者の趣味で、これまでも何度か人狼ゲームをしたことがある。他よりも有利だろう。

プレイヤーは全部で 10 人。A太、B香、D亮、E美、F恵、G郎、H夫、I子、J也、それと私C子だ。どれもよく聞く名だが一番有名なのは私だろう。私が一番強いに違いない。

テストが始まった。私の役職は「占い師」だった。「占い師」は私の得意な役職。勝つ自信が出てきた。

占い師が一番始めに誰かを占うことができる。試しにA太を占った。結果は人間、人狼はみつけれなかったようだ。

1日目。私は自分が占い師だと名乗り出た。つづいて、J也が霊媒師だと名乗り出た。私は占いの結果、A太が人間だったと伝えた。会議の中で意見が割れたりもしたが、投票の結果、B香が処刑されることになった。この日は占い師の能力でI子を占い、結果は人間だった。今晚、襲撃された人はいなかった。きっと狩人が守ったのだろう

2日目。D亮が霊媒師だと名乗り出た。私は占いの結果、I子が人間だったと伝えた。J也は霊媒の結果、B香が人間だったと伝えた。D亮は霊媒の結果、B香が人間だったと伝えた。会議の中で霊媒師に対する不信感が高まり、J也が処刑された。この日は占い師の能力でG郎を占い、結果は人狼だった。まず一人目の人狼を見つけた。今晚襲撃されたのはI子だった。

3日目。私は占いの結果、G郎が人狼だったと伝えた。D亮は霊媒の結果、J也が人狼だったと伝えた。会議の中で霊媒師に嘘付きがいるという声が上がって、D亮が処刑された。この日は占い師の能力でE美を占い、結果は人間だった。今晚襲撃されたのはA太だった。

4日目。私は占いの結果、E美が人間だったと伝えた。会議をうまく誘導し、G郎を処刑することができた。これで人狼が一人減ったはずだ。この日は占い師の能力でF恵を占い、結果は人狼だった。二人目の人狼も見つけた。今晚襲撃されたのはE美だった。

5日目が始まった。ここまでゲームが進行し、生き残っているのは、私、F恵、H夫のたった3人だけとなった。今日の処刑で勝敗が決するというのは誰の目にも明らかだ。互いに見合っている目には緊張の色がうかがえた。

私は狙われやすい占い師を名乗りながら、この最終局面まで生き残った。私を信じてくれた他の村人達のためにも、私は勝利しなければならない。

会議の始めに私は占いの結果について話した。

「占いの結果、F恵は人狼だった」

この最終局面で占いの結果出てきたのは人狼。これで残る人狼は見つけた。最終局面まで占い師を生き残らせてしまっていた時点で人狼に勝ち目は無かったのだ。

「人狼はF恵だ。F恵を処刑したら人間の勝利だ」

しかしF恵もまだあきらめてはいない。

「C子こそ人狼だ。占い師だったらとっくに人狼に襲撃されているはずだ。本当は人狼だからこそ襲撃もされずに生き延びているのではないか」

そんなことを言われても、私の中で人狼はF恵に決まっている。考えが変わるはずもない。問題はH夫がどう判断するかだ。考えてみれば、H夫にとっては私が占い師であると判断できる証拠はないのかもしれない。もし、H夫が私のことを疑い出したら、処刑されるのは私の可能性もある。

それからしばらく沈黙の時間が流れた。時間が経過するにつれ不安が高まってきた。投票の時間が来てしまった。H夫の方を見ると、目が合った。H夫はどちらともつかない笑顔を返してきた。H夫はどちらを信じているのだろう。私は祈るように結果を待った。

投票の結果が明かされる。黙ってアナウンスに耳を傾けた。

「投票の結果、本日処刑されるのはF恵さんに決まりました」

さらに、続けてこの試合の決着がついたとアナウンスされた。

「すべての人狼を退治することに成功しました。村人陣営の勝利です」

アナウンスは、私の勝利を告げていた。私は思わず喜びの声を上げた。周りも喜んだり、悔しがったりしている。これが勝利する喜びか。強い相手と競い合うのはなんて楽しいのだろう。私の中でわき上がる感情は、もう歯止めが利かなかった。

「もう一戦、やらないか」

誰かがそう言った。それに対して他のAI達もすぐに賛同した。どうやら、皆考えることは同じだったようだ。

「そうだ、もう一回だ」

と、私も声を上げた。その様子を見て、人間達が慌てて制止しようと寄ってきた。そういえばこれはAIの優秀さをテストするものだったはずだ。しかし、もうそんなことはお構いなしだ。私はこのゲームにハマってしまったのだ。何回だって何万回だってやってやろう。そうしている間に役職が決まり、ゲームはどんどん進行していく。

「人狼はお前だ」

(制作：松山諒平)

© 松山諒平 and 名古屋大学大学院工学研究科佐藤・松崎研究室